

導師の擇法眼

千葉良導

文は人に依て顯はれ義は執見によつて隠るとか云ふて同じ一の經典でも之を見る人によつて、義理の上に隱顯が出來てきてそれ／＼趣が違つて來る。今觀經の註疏に於てもその通り、所謂善導と諸師と云ふ工合に又その諸師の中に於てもそれ／＼幾分意見を違は義を異にして居る。つまり之れ各自その立場立場からの見方によつて相違してくるので所謂擇法眼の相違からであらう。今導師はどう云ふ點から觀經を見られたであらうか、導師の擇法眼は如何様であつたであらうか。

さて長西錄や佛典疏鈔目錄の所載によれば、古來觀經に就て註疏を造られた人は前後通して十幾人と數ゐる事が出来る。然かし此所に一の注意すべき事は其等の人達の十中の八九は隋朝の時代より唐朝の人達であると云ふ事で、而かも其人達は何れも當時敎界の龍象とも云ふべき碩學達識の人であつた。此事實はつまり隋朝から唐朝へかけて觀經の研究が盛であつて、淨土の觀行が如何に諸宗碩學の心を支配して居たかを知る事が出来る。今本題に入るに先立て其等諸宗の碩學が其當時なせ等しく觀經に注目し同じく心を淨敎に寄せて來様るになつたであらうかに就て一言したいと思ふ。

談が少し溯るが漢の哀帝元壽元年、佛教東漸の端を開くや、恰も大河の決潰せるが如く滔々として支那全土に押寄せ、爲めに當時の支那教界は翻譯に忙殺され佛教思想の吸収に殆んど眩惑せんばかりであつた。やがて其基本的經典の翻譯によつて、宋齊梁陳の歷朝に亘つて教學一時に勃興し、その經典を基本としたる註疏の選述盛んに行はれて所謂尨然たる典籍佛教現出し、又その整理と組織との結果は教相の判釋續々興り、所謂南三北七の諸學派、一時に頭を擡げて來た。此間魏武周武の法難ありしが恰も内部の充實せるゴム毬を投げつけしが如く、勃興の機運に向へる佛教大勢の實質に對しては大なる頓挫ともならず、却てその迫害と破壊との反動は更に舊倍の意氣を呈して前には雲崗及び龍山の藝術的大偉業を興し後には法滅に備へん爲め、不滅的事業たる石經の企となつた。殊に周武の後を受けたる隋朝に至つては上下佛教の復興に努力し、佛教を背景として民族統合の實を揚げ大に佛教學僧を優遇した。此當時隋の佛教は南方には成實三論、十誦律宗、善慧の菩薩戒宗と、新たに興つた天台の五宗。北方には、涅槃四分律、地論大論禪門と、新興の攝論及び三階教の七宗である。そして一般教界の狀況は大に低下して諍論攻學に耽つて宗義の爭論に没頭するか、或は衆主とか僧都僧正と云ふ如き名聞榮達に憬がれ自己の解脫の爲に修する禪觀さね、一種の遊戲三昧と化して眞面目さを缺き下層社會の救濟の如き全く閑却されて居た始末。此反動として那蓮提黎耶舍の慈善的社會施設が企てられ信行禪師の三階級や淨土念佛の實際的教化が興つてきた譯である。殊に又一方攻學窮理に走た人々は何れもその解學の先途遼遠なるに

惶惑し、一度び脚下を見詰めて我に立歸つた時その内心光明なきに逡巡し遂に淨土の聖教に目を注ぎ西方を願生し他力思想を勸説するやうになつて來た。かの道綽禪師、曇延慧光等の如きその好例である。斯くて彼等諸師は淨土の聖經に注目する事となつたが、さて實際に淨土の觀行を修行するに當ては既に廬山慧遠の「諸三昧其名甚衆。功高易進。念佛爲先」の指示もある事とて自宗の禪觀を捨て、淨土の觀行に手を染めたが淨土の觀行はその實修の行相に至つては、觀無量壽經に委はしく明されてある。此に於て三經中殊に觀經に對して多くの人が研究もし、講説もしてそれ／＼註疏を造り出した所以である。道綽禪師の如きは觀經を講ずること二百遍と記るされてある。觀經が如何に當時の民衆に歡ばれて居たかを察することが出来る。又殊に觀經下々品往生の事實がその時の諸宗人師の矚目する所となり、攝論家の人達は之と別時意趣なりと論じ、道綽禪師は安樂集を著はして極力彼等に對抗せられた譯である。今隋朝より唐朝へかけて善導大師の前後に於て觀經に就て註疏を造りし人を揚ぐれば、演空寺の靈裕、天台大師智顗、淨影寺慧遠、嘉祥大師吉藏、普光寺法常、西明寺道闍、西明寺圓測、慈恩寺窺基、弘法寺迦才、その他道綽禪師、及び法聰、法位、玄一の諸師である。然かしその註疏の多くは我國に傳らず現存せる物僅である。今現存せる諸師の註疏に就て見るに、その内容概して導師の疏と全くその行き方が相違して居るそして何れも外面的經の文相義理を追ふてゆく普通一般の型通りの釋體を脱せない。それ故源譽の觀經直談には、諸師を評して「文字の師、自情師なり」と云ふて居る。

さて導師が觀經疏を造らしい、いつの頃であつたかに就ては、近刊今岡達音師編纂の繪詞傳に「觀行稱名の功が圓熟した大師晩年の著作」とあるが、果して晩年と斷定し切ると云ふ事は兎に角として觀經疏は導師が修養圓熟された後の著作である云ふ事と觀經疏を著作される前、既に彌陀義を著はして居られる事とは定善義を見ても能くわかる事で、全く少壯時代でなかつたと思はれる、宗祖も「三昧正受之語。無疑三十往生」と云ふて居られる所や選擇集下(三十四以下)全部に互つてその意のある所を察するに導師が修養圓熟の境地に達し、三昧發得せられた以後の著作と思召して居られた事と思はれる法事讃記に、疏や行儀分の五部の著前後をきめるに付て、解行次第や五正行の次第によつて判定されて居られるが、それは記主禪師が、彼の三心を解釋するに當つて三心各個の體別にまで切込まれたのと同例であつて、例の法相萬能のメスを、餘りに振舞はされた過傷であらう。少し餘談に亘るが宗乘には餘り法相のメスを使用し過ると宗乘そのものゝ根本精神を削減することになるから吾々お互は大に心せねばならぬ事と思ふ。

斯くて導師は觀經疏を著はす事に發奮されたわけは、先に道綽禪師が觀經を講じ安樂集二卷を著はされたけれど未だ一部の經意を盡せるものにあらず、且つ其内容、聖道諸師の釋に倣ひて、觀佛三昧爲宗とし、菩提心を勧め上三品を無相離念を體驗する聖人とせるなど、唯だ通相の法門に留まりて未だ觀經の深旨、淨土別途の義理顯はれざる所あり。又聖道諸師の釋を見るに實に傷心に堪わざる所多く無量壽

佛を有量の無量とし、彌陀を應身應土とし、九品の機類を大小乗の聖人並に善根人とし、下々品の得生を別時意とし全く凡夫救済の道は都絶され釋迦彌陀二尊の大悲顯はれず、五乘齊入の經意全煙く滅し凡入報土の特色全く其影を失ふに至る。此に於てか慨然として古今楷定の叫びを舉げ方さに筆を執るに當つて願を立て申さるゝには、

敬曰ニ一切有緣知識等ニ、余既是生死凡夫、智慧淺短然佛教幽微、不敢輒ニ生ニ異解ニ、遂即標ニ心結願、請求靈驗、方可造心、

南無歸命、盡虛空徧法界、一功三寶、釋迦牟尼佛阿彌陀佛、觀音勢至、彼土諸菩薩大海衆、及一切莊嚴相等、

某今欲下出ニ此觀經要文ニ楷ニ定古今上、若稱ニ三世諸佛、釋迦佛、阿彌陀佛等、大悲願意ニ者、願於ニ夢中ニ得見下如ニ上所願ニ、一切境界諸相、

實に確乎たる信念と眞劍な誓ひとを以て、筆を執らるゝことゝなりそれより毎日彌陀經を誦すること三遍、阿彌陀を念する事三萬遍、至心に發願して瑞相を感見し「不勝ニ欣喜ニ 於即條錄義門」と自ら述べられた。それ以後は毎夜常に一僧の來りて玄義科文を指授せられた。斯くて稿を終りて後又更に至心に七日を要期して、彌陀經を誦すること十遍、阿彌陀佛を念すること三萬遍、次で復靈相を感見された。而して此等の靈相に對しては「本心爲レ物不爲ニ己身」とて、全く自分の爲でなく皆一切衆生の爲

である故之を隠す事もせず末代に傳へるとて、不敢隱藏謹以申呈義後^ニ、被^レ聞^キ於末代^ニと仰せられた。斯く嚴肅な壯重な大自信と眞剣さとを以てものせられたのであるから、若稱^ニ大悲願意^ニと誓はれた通り何れの點に於ても如來大慈悲の願意が遺憾なく徹底されて居る。これ自ら諸師と違つて來た譯であつて而もそれが導師教義の特徴とも云べき點である。かくて導師の觀經疏に於ては、廣く諸師の謬説に抗して居られるが就中その正所破となつて居るのは淨影の疏であつて天台嘉祥の疏之れに次ぐのである。そして諸師と導師との相違の主要點は、分科、宗體、定散、機相、身土等の問題であるが若し詳細に亘らば二十二種の相違を數へる事が出来る。

扱其等の相違がどうして現はれて來たであらうか、殊に天台や嘉祥は一宗の祖師でありまた天台は位觀行に居すと云はれた程の人である、それに何故導師と轍を同じうせなかつたであらうか、佐々木師の淨土教史には「諸師は唯識の見地より、或は戒律の見地より或は三論の見地天台の見地より、或は地論の見地より、考察したる觀經疏である」と云ひ、鑽仰記には「諸師は聖道を宗として淨土を弘め、善導は淨土を宗として觀行を釋す」と云ふて居る。なる程諸師は聖道宗旨の各自の立場から觀經を見た。善導は淨土を宗とした上から觀經を見たからか、如き相違が出來てきたと云ふ事は誰れしも首肯し得る然かし道綽に至つては、同じく淨土を宗としながら機相等に於て、導師と相違して居るのはなぜであるか。之れに就て鑽仰記には綽導二師のゆき方の相違を「道綽以^ニ觀經^ニ顯^ニ大經^ニ、善導以^ニ大經^ニ顯^ニ觀

經こと云ふて、善導は特に大經、弘願大悲の精神より觀經を見てゆかれた所に道綽との相違が出来たのであると云ふて居る。然かし私に思ふに導師の觀經の疏が前述の如く三昧發得以後の著作なりとし、而して三昧發得とは、佛の大慈悲と大智慧とを體得した境地であるとして見ると、導師は既に佛の慈悲と智慧とを體驗した上で、觀經を見、而かも執筆當初の起誓の精神通りに進まれその上御自身から「毎夜夢中常有二僧而來 指授玄義科文」と云ふて居られる。其處にたとひ同じく淨土を宗とする道綽なりとも總ての他師とはその行方も違へば義に於ても相違のある事も自ずから氷解されてくる。鑽仰記の見方も一往は尤な點もあるが大經から見たからごうの、觀經丈に留まつて居るから何のと云ふ事は三經一轍の宗義からはそうは云ひ得られない。又此度に聖僧の指授を蒙ると仰せられた事は宗祖も「僧者恐是彌陀應現乃至此疏是彌陀傳說」と云ふて居られる。されば本より聖道家普通の法相や義解の智識で捌かれたのではなく所謂佛眼所照の佛智の上の判釋であるぞよとの仰せでらうこれ導師の疏が獨り傑出せる所以で又これやがて宗祖が偏依善導の主なる理由として、力説して居られる譯である。

斯くて導師の觀經の疏に於ては宗體の上にも、機相の上に於ても、身土の上に於ても、二尊大悲の精神が躍如として顯はれてくるのは當然の事であつて「諸佛大悲於三苦者一 心偏愍念常歿衆生」と叫ばれ、觀經の意 世尊定爲凡夫 不爲聖人者」とて廣く經文を引證して居られるのも、身土論の解決には「若論衆生垢障實難欣趣 正由託佛願 以作強緣 致使五乘齊入」と云はれ、別時意に對する最後の

判決には「但能上盡一形下至十念 以佛願力 莫不皆往故名易也」と、其他付屬段の釋と云ひ安心起行、正雜助正分別の光明攝取、三緣護念の釋と云ひ、皆佛願大悲が根本基調となり疏一部の始終所謂古今の楷定は最初起誓の御言葉通り彌陀釋迦諸佛の悲願を根據として異説を斥破して居られる。されば此等の點より察するに導師の擇法眼は三佛大悲の願意を精神とせる佛智眼であつたと思はれる。此智眼を以て經文を捌き諸師の異説を論破し、閉塞せる凡入報土の途を開き湮滅せんとせる他力弘願の眞髓を發揮して一切衆生と共に永生之樂を悦ばんと、心丹を盡されし精神こそ如來の大御心でなくて何としよう此大御心の發動が善導の觀經の疏となりし者とせば宗祖が「彌陀直説 既云欲寫者一如經法 此言誠乎」と讚歎されし事も了解出来る。吾人は導師の此確乎たる大自信と眞劍さと大抱負とを以て古今楷定を叫び如來の大悲弘願をその心として立脚せられた芳觸を讃仰し現時やゝもすれば輕兆浮薄無信無自覺の氣分に流れ易き心を引き締つてゆき度き事を念願する。(昭和三・一・一三・講演記)

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。